慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	先生には酒場がよく似合う
Sub Title	
Author	安倍, 寧(Abe, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.367- 369
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0367

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

先生には酒場がよく似合う

安倍　寧

白井浩司先生との最初の出会いは、私が慶応義塾大学文学部に入学した昭和二十七年四月である。あれから四半世紀どころか三十年の歳月が流れたとは……。

当時、白井先生は、三田の少壮助教授として現代フランス文学を講じておられたが、同時に日吉の新入生にも初級フランス語を教えておられた。私自身アーベーセーから教えていただいた学生のひとりである。

ところが、どんな教科書によるどんな授業内容だったか、今、思い出そうと努めてもさっぱり思い出せない。なにせ三十年前のこと、記憶が完全に薄れてしまったというより、当方がなまけ者の駄目学生だったせいだろう。

授業のほうは忘却の彼方なのに、先生が二回ほど、前の晩に見てこられた芝居の話をされたことだけは、なぜか奇妙に、しかもはっきりと記憶している。

学生というのは、先生方が脱線された話のほうを印象深く受け止めるものなのだ。

先生が感想を洩らされた芝居は、ひとつは今は亡き加藤道夫作の「襤褸と宝石」、もうひとつは堀田善衛原作、福田恒存脚色の「広場の孤独」であった。私は記憶に間違いなければ、前者は俳優座劇場における俳優座公演、後者は三越劇場における文学座公演だったはずである。

先生は、このふたつの芝居のいずれにも大いに不満足のように見受けられた。

「襤褸と宝石」のエンターティンメイト性に憤激されて、「あれじゃムーラン・ルージュですよ」と極言されておられたのを、私はきのうのように思い出すことができる。「広場の孤独」については、原作のアクチュアリティが薄められているところに、不満の意を表わしておられた。

先生は、戯曲をいくつも書いているサルトルやカミュの研究者であり翻訳者であるから、演劇というジャンル

に人一倍関心を抱いておられたのは、なんら不思義ではない。しかし、私たち新入生に積極的にこれらの芝居について語られたのは、ただそれだけの理由からではなかろう。

私は、むしろ加藤氏や堀田氏との同時代人意識の自然な発露というふうに考えたい。

ちなみに、「新潮日本文学小辞典」の加藤道夫、堀田善衛の項をひもといてみたら、前者については、

「大学英文科にすすんでからは、芥川比呂志、鳴海四郎、原田義人らと研究劇団『新演劇研究会』を結成し、また劇作、戯曲翻訳をはじめた。堀田善衛、白井浩司と知り、内村直也にも知られる」

とあり、また後者については

「昭和一一年慶大予科にはいり、法学部政治学科に進んだが、文学書を耽読し、仏文科に転じ、白井浩司、村治郎、加藤道夫、芥川比呂志らの学友として知った」

とあった。

白井先生は、昭和十年代、暁星中学から慶応義塾に進学された当時から故加藤氏や堀田氏とまったく同じ文学的サークルのなかにおられたわけで、教室で先生が、加藤、堀田と呼び捨てにされても不自然さはまったく感じられなかった。

先生は、「襤褸と宝石」や「広場の孤独」の舞台の出来具合だけではなく、両氏の人柄について語られたこともあった。

私にとっては、先生から折にふれてそういう話をうかがえることが、そのまま大学で学ぶことの歓びに繋がっていたふしがある。正直なところ、私は、白井先生のその種の文学的閑談を通じて、急に文壇や劇壇が身近かになったように錯覚したくらいであった。

大学二年目、専門課程を決めなければならなくなった時、私は、幸いフランス文学科に進学することを許された。これからますます親しく先生の謦咳に接することができると楽しみにしていたところ、その年から白井先生はフランス留学に出掛けられてしまった。私だけでなく先生を慕う学生たちは、どんなにがっかりし心細く思

ったことか。

しかし、私がフランス文学科在学中に帰国されて、つたない卒業論文を読んでいただけたのは、望外の歓びであった。

卒論もそうだし、先生と私との因縁はもろもろの点で浅からぬものがある。昭和四十五年から丸十年間、三田で「映画演劇論」の講座を受け持たせていただいたのも、先生の御推挙あってのことである。

ところで、先ほどからこの小文を書きすすめながら、リチャード・アベドンがサントリーの広告のために撮影した先生のポートレートが、頭にちらついて仕方がない。さすが世界一流の肖像写真家アベドンの撮ったものだけに、新聞紙上を飾ったあのポートレートは、先生の飄々たる人柄をあますところなく捉えている。

あの写真の先生は小脇に二、三冊原書を抱えておられるので、これから教室に向われるところのように見えるが、私には講義から解放されて、いざ酒場への図のように思えてならない。なにせ、先生とお会いするのは、圧倒的に酒場が多いものだから。

先生、近々またどこかの酒場でお会いしましょう。

（音楽評論家・昭和三十一年仏文科卒）

白井先生と私

浅利慶太

「（あなたにとって）恩師は」と問われると、ためらわずに「加藤（道夫）先生と白井（浩司）先生」と答える。

もちろん、劇団四季の名付親である芥川（比呂志）さん私の在学中、仏文の主任教授だった佐藤（朔）先生のお二人も、私にとって〈恩師〉である。

一口に〈恩師〉といっても、いろいろなタイプがあると、私は思う。

自己の才能を見つけ引き出して下さった、あるいは、人生の方向を指し示して下さった〈恩師〉は、私の場合加藤先生である。加藤先生は、私に演劇の何たるかを教えて下さり、若くして世を去られた。訃報に接したと